

2023年度 園評価		つくし保育園
保育方針	<ul style="list-style-type: none"> ・未来を担い生きる力となる子どもたちの全面発達を保障する努力をする。 ・保護者の労働を保障するとともに保護者がより良い条件で働き続けられるよう保護者とともに努力する。 ・保護者とともに子育てについて知恵を出し合い学び合い、子ども・保護者・保育者がともに育ち合う保育園づくりをめざす。 ・子どもの人権を守り地域の連帯の中で育て、地域の人々と力を合わせ保育条件の向上に努め、平和な社会を作る努力をする。 	
保育目標	<ul style="list-style-type: none"> ・健康な子ども ・よく見、よく聞き、よく考える子ども ・自分を表現できる子ども ・仲間の中にいることを喜び、仲間を大切にすること 	
実践・評価・反省		
<p>～心身ともに健康な子ども～</p> <p>○新型コロナウイルス、ノロウイルスの感染症が蔓延した。特にコロナも5類となって制限も緩和されている中で、2月には職員のコロナが蔓延し休園処置をとった。</p> <p>○環境設定や安全に気を付けながら保育していても、ヒヤリハット・事故などは起こってしまう。2歳児の転落事故では、一瞬で事故が起こることを実感した。今年度は、事故が起こった時の状況を保育者が把握できていなかったという事故も数件あり、クラスに設置しているカメラを見返して状況を検証することも多かった。</p> <p>5歳児では子ども同士のトラブルや、遊びの延長で友だちの髪の毛を切ってしまうということもあり、子どもの話だけでは見えなかった状況をカメラを使って把握することもできた。カメラを使って状況を把握すると同時に、その場面を保育者間でも「こうできたのではないか」と振り返り、次に繋がる手立てや関わりを職員間で共有できるとよい。広い視野を持ちながら保育をしていても、ケガやトラブルは起こってしまうこともある。保育者一人ひとりが子どもの姿、子どもの行動を予測したり見通しを持ち、状況を感じ取って行動する力を土台に、保育者間で連携を取りながら考えて行動していくことが大事である。また、基本は現場の保育者間で声をかけ、連携しながら保育をしていくことを大事していきたい。</p> <p>～自分で行動し考えることのできる子ども、感動する心を持ち、豊かに表現できる子ども～</p> <p>○新年度のスタートから体制が落ち着かない状況が続いた1年だった。夏辺りまでは、保育者はその日をどうやりくりしようか・・・と考えると心の余裕もなくなる日ももちろんあったが、目の前の子どもたちの”今”を全力に楽しんでいる姿に力をもらいながら保育をしていくことができた。クラスの保育もある中で、日々の保育には力は貸せないけど、話をしながら知恵を出し合ったり、アドバイスやフォローをしながら、それぞれができる所に自分の力を出しみんなで保育をしてきた。中堅保育者中心に自分のクラスだけでなく、子どもの姿や、大きくなりたい願いや葛藤、関わり悩みなど話ができる環境を作り出し、実践して、振り返って語り合い、また実践して…ということができることがつくしの強みだと感じる。子どもも色々な人と関わる事で価値観を広げ、自分らしさが作られてくる。職員もこの1年で色々な人とのやり取りの中で気づいたことを実践して、”自分らしさの保育”に手応えを感じている。その力を来年度につなげ、子どもと一緒にみんなで保育を楽しく作っていきたい。</p> <p>○今年度は新入職員を迎え、日々の保育を通して実践して振り返り、また実践…と保育や発達、手立てを考えたり、伝えながら一緒に作ってきた。経験が浅い、経験があるに関わらず、子どもは常に成長しているため、保育者も日々子どもの姿を通して悩み、学び、実践してを繰り返している。保育は大人も一緒にあそぶことで子どもの気持ちが見えたり、手立てや関わりヒントが見えてくる。子どもの遊ぶ力、考える力、様々な力や良さを引き出してあげるのは保育者と思うと、保育者も子どもと一緒に遊び込むことも意識していきたい。</p> <p>○今年度は子どもの”主体性”について話し合うことも多かった。主体性は子ども任せでなく、大人も願い、発達の道筋など見通して関わることなど、保育者も主体的に保育をしていくことが大切であることを共有しながら保育をしてきた1年だった。</p> <p>～仲間の中にいることを喜び、仲間を大切にすること～</p> <p>○コロナが明け、園内でもクラス間の交流が増えてくると、子ども同士の交流が充実することができた。朝夕の交流の中では、大きい自分を感じたり、憧れ合ったりと刺激を受け合うことができた。また、行事も園全体で取り組むことができ、楽しい雰囲気や楽しさをみんなで共有できた。</p> <p>○コロナへの制限が緩和され、保育内容や行事に”つくしらしさ”が戻ってきた。運動会は全体で、生活発表会は以上児と未満児に分かれて開催することができた。元のやり方に戻すことだけが良いのではなく、コロナ禍の数年で感じた行事の取り組みや内容を職員間で振り返ることで、行事の中身を検討して幅を広げたり、子どもの姿を見ながらどんなことを大切のしたいかなど意見を出しておこなってくることができた。子どもの姿も変わってくる中で、”昔”にこだわらず、目の前の子どもの姿や、周りの状況を見ながらやっていくことが、子どもにとっても達成感や”楽しかった”という経験に繋がっていくのだと思う。</p> <p>○今年度の総括では期ごとの会議で得たものを意識して保育をしながら、未満児会議などで実践して振り返ることができる場を作ってきた。実践→振り返り→仲間に語る→相手の価値を知ることを土台に、会議での学びの一つでも心にとめながら保育していくことを来年度も意識していきたい。</p>		

実践・評価・反省

～話せばわかる、聞けばわかる、だけでないのが保護者支援…～

- ・療育が必要な子どもたちは専門機関（リハ、こころの発達相談支援センター等）と連携を取りながら、必要な時に懇談を行い課題や手立て、成長を確認してきた。保護者の思いにもいろいろあるが、子どもの園での姿を保護者と共有することで、子ども親も安心して過ごせるのだと感じた。
- ・保護者の就労時間が長い、勤務形態も厳しく、送迎の連携もままならない。父母の身体も心配である。食事等含む家庭での生活はどのようになっているのか…と考える。また、母が自分で子どもを見たい思いが強く休むことも多い。友だちとの関わりを持たずに保育者に依存してくるこどもの姿、母の関わり方、思いを聴いていると、わかってはいるが…そうできない家庭等様々である。クラスは根気よく家庭と話をしているが、保護者支援の奥深さと難しさを感じる。
- ・11月、園児・職員合わせて25名のノロウイルス感染、2月、職員4名のコロナウイルス感染症罹患から、保護者へ自粛要請のお願い、またさらに増え7名となり休園措置をとらざるを得ない状況となった。園児も日をあけて5名罹患した。保健所や市と相談し、手洗い・消毒の徹底、おむつ替えの場所の一定化、紙おむつの処理、嘔吐処理については「誰かが出来ればいいのではなくどの職員もできるように…」と指導され改めて、職員間で感染症対策について確認し合った。排泄の自立のため布おむつの推奨をしてきたが、感染症対策とすると紙おむつが有効である。布おむつの良さを生かしつつ活動や体調に合わせて使用できるよう、布おむつと紙おむつの併用を行い感染予防をしていく。
- ・新年度、新入職員を迎え“さあ、一年頑張るぞ”の矢先に職員3名の長期病欠から始まった。職員配置の変更、中途採用など職員の補填を繰り返してきた。体制はその日にならなければわからない、保育が上手くいかない…等、心身ともに疲労を抱えての保育だったが、休職中の職員が戻ってくるのを心待ちにしてきた。生活づくりや遊びでの悩み、職員間の不協和音が見受けられる時には中に入り、問題について一緒に考える中堅の力に感謝である。「苦しい…」、「助けて…」と声をあげ、声を掛け合い・助け合う、一人ひとりが全体に目を配ることを意識することで職員集団としても高まってきている。また必死に保育しながら、一年を無事に終わられることに安堵している。
- ・共立福祉会の理念について、4月職員集会での職員の提案や“何を大事にしていくのか…””こども主体とは…”と若い職員も増えていることも含め、いろいろな観点から理念が分かりやすいものになるようにと理念検討委員会を発足し(園長・主任・副主任・研修委員)、定期的に保育について語り合いを持ち検討している。自分たちの保育の振り返り、ベテラン・中堅の今の世の中とのギャップ、若い世代の心模様、固定概念の頭のリセット、子どもたちに大事なこと等について出し合い、すぐに答えが見つかるわけではないが様々な意見が出され、考えるきっかけとなっている。